



ISSN 0286-1968

河上肇記念会館

NO. 31

1988・9・10

一九八八年度総会御案内

恒例の総会日程をお知らせいたします。
皆さんのご参集をお願い申し上げます。

日時 十月十六日（日）

十一時～十五時

場所 洛北 法然院

左、鹿ヶ谷御所ノ段

tel 〇七五―七七一一二四二〇

講演 和田 洋一 氏

（●同志社大学名誉教授）

演題 河上博士をどうみればよいか

会費 当日 四、〇〇〇円

（昼食を含む）

返信はがきに出欠をご記入の
うえ、折返しお送り下さい。

（なお、四〇円切手をお貼り下さい）

目次

一九八八年度総会御案内		(1)
岩国と河上先生		(2)
特集 河上肇と私		(4)
山田 一英		(6)
山本 正志		(7)
佐藤 武義		
一海知義著「河上肇そして中国」 を再読して		00
石井 公代		
「社会問題研究」合本寄付		03
岩国市立図書館		
山口河上会		
会員通信		05

岩国と河上先生

小 西 輝 夫

会報二九号で、細迫朝夫氏の講演録『河上肇と新労働党』を拝見しましたが、一九八六年四月、山口河上会の第一回秘会が岩国で開かれたとあるのに、深い感慨を覚えました。私が岩国をはじめで訪問したのは一九七二年四月一日で、さくらが満開でした。しかし私が岩国を訪れたのはさくら見物のためでなく、河上先生の生家を訪ねるのが目的でした。当時、私は『河上肇の』奇異なる体験について」という論文を書いていましたが、ちょうど広島で学会が開かれたので、現地を一度体験しておきたいと思い、発表の合間をぬって岩国にかけつけたのでした。錦帯橋附近はさくら見物の人びとであふれていましたが、土産物屋などできいても河上先生の生家を知る人はいません。河上肇という名前すらほとんどの人が知りませんでした。以前、愛知県の田原町で、渡辺肇山の遺跡をたずねたときも同様の体験をしました

が、岩国はとくにひどいという印象をもちました。先生の帰郷を町議会の議決で拒否した町だけのことはある——と半ば感心しながら、ふと気がつくとう市の図書館があったので入ってみました。ここなら知っている人がいるかも知れないと思ったからです。果して郷土史家だという初老の男性がおられて、案内をかってでて下さいました。大岡昇とおっしゃるその方は、長らく教職にあり、退職後、市史編さん室の嘱託をされているということでした。氏は先生の生家だけでなく、河上徹太郎氏の生家も案内して下さい。私は地獄で仏の思いをしました。以来、大岡氏とは十五年米文通をつづけています。

岩国へは昨年（一九八七年）二月三一日に再訪のチャンスを得ましたが、大晦日のことでもあり、大岡氏をおたずねせずに帰り、あとで手紙をさしあげました。すると折り返し、氏から『激動の岩国を生きた』（発行—

岩国市立岩国図書館」という、氏が編さんされた本が送られてきました。岩国の、いわば戦前・戦中・戦後史で、関係者の証言があつめられているのですが、太平洋戦争編に、河上先生の「偶成」(著作集第一巻・うた日記より)がのせられているのです。巻末の岩国市年表にも、昭和二十一年一月三日と、日付はまちがっていますが「河上肇死去」の項目がのっています。そしてこの本の序文は「不戦の誓い」というものです。岩国にもやはり先生の精神を理解する人びとがいたのだなとうれしくなりました。早速、大岡氏にお礼状を出し、年末再訪の折、錦川畔に、元参議院議長S氏の銅像が立っているのを見たとを書いたところ、氏から「政治家のいのちは一時のものですが、河上先生のいのちは永遠です」とある返事をいただきました。

岩国はやっぱり先生の故郷だったとつくよく思ったこととです。

(一九八八・五・二)

(精神科医)



「山口河上会」総会で講演する野岳さん(4月24日、岩国)

河上肇記念会山口懇話会」した。
 (山口河上会)は四月二十四日午後一時三十分から岩国市中央公民館で定期総会を開き、八十人が参加しました。総会では世話人代表安部一成、山大教授のあいさつで開会。野岳章子前京都府立女子大教授が「河上肇の女性

親」とい
 ない。
 細追
 介され
 岳文章、
 京都に
 家との
 ている
 をたど
 ました。
 野岳
 えてき
 し河上
 おり、
 への入
 も「妻
 ことが
 だ」と
 れ、河
 婦人の
 「自由
 た」と
 て話し
 二時
 て、総

『特集』

河上肇と私

山田 一 美

「河上肇と私」といっても世代が違うので直接、面識があるわけではない。だから著書を通しての出会いということになる。また河上を研究してもいいので、「素朴な河上肇観」「素人の河上論」であることをお断わりしておきたい。

河上肇と最初の出合いは、『第二貧乏物語』である。本書により剰余価値論と唯物史観の概説を知ることができ、社会発展の原則を学ぶことができた。それは私にとって新鮮であり、目の前の鱗が落ちる思いであった。大げさに言えば、思想の量から質への発展である。その時は二十歳前後であったから、もう十五、六年の歳月が流れている。

その後あるところの『資本論講座』に参加して『資本論』を繙くようになって、河上の『資本論入門』をめくってみるようになった。それは『資本論』の単なる解説

書ではなく、河上の学問の到達点を示す高度な理論書のように思う。それにより難解で、わけの解らなかつた『資本論』も、難解ながらも、何かが見えてきたような気がしたものである。

河上の最高傑作は、なんといっても『自叙伝』であろう。いろんな評価があるようだが、読んでいて楽しいし、手を伸ばせば届きそうに近くに作者が居るような錯覚に陥るくらいである。また名文で、文学的にも大要素晴らしい文章だと思ふ。このような種類の書にありがちな、我田引水や自画自賛、思い違い、記憶の不正確さなどを差し引いても、やはり本書の価値は、そこなわれな

いだろう。

今年は江戸時代の唯物論的な自然哲学者、三浦梅園没後二百年にあたる。そこで河上が梅園をどう観ていたかを掻い摘んで見てゆくことにする。

「『梅園全集』ノ公刊」（一九一三年）と題された一文が『河上肇全集』に収録されている。二頁程の短いものであるが卓見に富んでいる。

「茲ニ簡單ニ其人其書トノ紹介ヲ試ミル。」（『河上肇全集』第七卷四一四頁）

としている。書については紹介しているが、どういうわけか人については、ふれていない。注目すべきは「梅園」の評価である。

「只ダ此ノ『梅園』ノ一書ハ、眼前政策ノ問題ヲ越エテ、稍々深ク純理ノ研究ニ入レル所アリ、或ハ以テ我國ニ於ケル経済学書ノ嚆矢ト為スタ得ンカト思フテ、予ネテヨリ珍重禁ゼザル所ノモノデアル。」

（『河上肇全集』第七卷四一四頁）

梅園を経済学者として評価したのは、恐らく河上が最初ではなかったかと思われる。そういった意味で河上は経済学者梅園評価の嚆矢である。『梅園全集』を次のように紹介している。

今マ此ノ専ムベキ学者ガ兩愚ノ野ニ在ツテ、思ヲ潜メ想ヲ練リ、カクテ自家独創ノ宇宙觀、哲学、倫理学ヲ書キ遺シ置キタル玄語、贅語、散語ヲ始メトシ、其他ノ著作、隨想隨録ノ類ニ至ルマデ、尽ク之ヲ網

羅シタル者ガ、即チ此ノ『梅園全集』デアル。」

（『河上肇全集』第七卷四一五頁）

ここでは単に『梅園全集』の内容紹介にとどまらずに、河上の梅園にたいする尊敬の念も表れている。『梅園全集』には梅園の著作の殆どが収録されているが、網羅はされていない。というのは「蒲子手記」と題された註書ノートや幾つかの書簡が未収録だからである。また次のようにも言う。

「梅園ヲ研究セントスル者ニトツテハ、誠ニ唯一最上ノ公刊物デアル。」（『河上肇全集』第七卷四一五頁）

（五頁）

『梅園全集』の刊行により梅園研究は新たな段階に達した。それまでは主著『玄語』などは刊行されては、おらず人目に触れることも少なかったのである。それではなぜ『梅園全集』の刊行が可能だったのかというと、梅園旧宅に殆どの著作が所蔵されているからである。一九四一年、三枝博音は『三浦梅園の哲学』を著し梅園研究における金字塔をうちたてたのである。最後に河上は『梅園全集』の欠陥についても触れている。

「惜イ哉、書中誤植少シトセズ、コハ今後版ヲ重ヌル際是非トモ厳密ナル校正ヲ願ヒタイモノデアル。」

（『河上肇全集』第七巻四一五頁）

その後、今日に至るまで『梅園全集』は再版されておらず、従って誤植も訂正されていない。だから河上のこの言葉は今もって新鮮である。また、それは梅園研究にとってひとつの課題にもなっているのである。このように見ると河上の梅園評価は、おおむね適切なものであることがわかる。好意的に評価しているが、かといって盲目的には、なっておらず、科学的、客観的に観てい

河上肇と私

一 京大河上祭のころ

私の京大入学は一九六五年で、じつはこの年の河上祭の時まで河上肇という人を私は知らなかった。

この時期の学生運動はその前年に全学連が再建されるというような活発な時期であり、経済学部同好会（学生自治会）も経済学部学生学会も毎年のこととして京大河上祭をとりくんできていた。

るのである。このような態度は、われわれ梅園研究者にとっても不可欠であり、学おべきところであると思われる。

河上をどう評価するにせよ、その歩んだ道、その生きざまは人をひきつけてはなさないものがある。河上の最大の功績は、ここにあるのかも知れない。

たどりつき　ふりかえりれば山川を　越えては越えて来つるもの哉

山　本　正　志

河上祭の記録を見ると六五年の記念講演は宮川実先生がされている。（六六年は鯉川虎三京都府知事、六七年は柳田謙十郎先生）

こうして私ははじめて河上肇の自叙伝を読み、それとともに鯉川知事が河上肇門下生であることも、京大経済学部の流れの源流に河上肇の学問があることも知った。

二 大学紛争のころ

六八年ころから京大でもいわゆる大学紛争がおこった。私たちは「封鎖反対、ゲバ棒とヘルメットは学生運動にはいらない。」という立場でがんばった。

当時は、大学封鎖のなかで授業もストップ、研究室も「全共闘」学生に荒らされ放蕩という中で、経済学部同好会のボックスが襲撃され、河上肇の肖像画に鉄パイプがふりおろされたのもこの時期のことであった。

河上肇の肖像画にその後おめにかかったのは河上肇生誕一〇〇年記念の資料展示が思文閣でおこなわれたときで、私はおもわず「河上先生すみませんでした」と口のなかでつぶやいたことを思いだす。

三 法然院での墓参のつどい

京都におられた塩田庄兵衛先生や経済学部出身の方も参加しての「貧乏物語音読会」がはじまったのは一九八

河上肇と私

私がはじめて河上肇の著作にふれたのは、一九五二年六月十五日発行の自叙伝（岩波新書）である。購入日は

〇年からのことになる。

私は都合がつかずこの会合には顔を出せなかったが、音読会のよびかけた法然院での一月三〇日の墓参のつどいには参加させていだいてきた。

ところで昨年の四月、それまで共産党の専従であった私は、京都市会議員に立候補して当選した。

この選挙の前の一月、墓参のつどいで私は「もし市会議員になったら、法然院の近くに住んでいることでもあり以前に安井さんがやっておられた名刺入れの返礼の仕事にあたりたい」と公約を述べた。

この件については記念会事務局より「当分は間にあっている」とのお返事をすぐいただいたので私の公約は棚上げとなっている。

佐藤 武義

わからないが、余白に赤鉛筆で「一九五二・九・一八読了」とある。この年七月十一日から十四日まで、当時の

反動高山市長のもとで首切反対闘争があり、私は上京区役所でのストライキに参加し戒告処分をうけた。組合幹部の多くが懲戒免職処分となり、闘いは警察の弾圧もうけて敗北した。おそらくその直後に、自己のこれからの人生への何かの指針を求めるべく、この自叙伝を読んだものと思われる。二十一才の時である。

本にはところどころ赤線が引いてある。

「寧ろ日本人全体の幸福、日本国家の隆盛を念とすればこそ、私は一日も早くこの国をソヴェト組織に改造せんことを熱望したのである。戦争の真最中に自国の敗戦を希望したからといって、それは愛国主義者でないとは限らない。」

「要するに私は、最初ブルジョア経済学から出発して、多年安住の地を求めつゝ、歩一步マルクスに近ずき、遂に最後に至つて、最初の出発点とは正反對なものに転化した。了えたものである。……だが、思索研究の久しきを経て漸く茲に到達しえた代りには、私は今たとひ火にあふられても、その学問的所信を曲げがたく感じている。」

などのところである。

その後私は京都市職労の役員となり、組合活動に参加

する様になったが、この河上肇が生きた精神、「未来を信じ未来に生きよ」と当時の青年、学生を常にはげましていた末川立命館大学総長の言葉、そして共產主義が私のその後の人生の大きな支柱となった。

数年後、古本屋で大正六年五月一日弘文堂発行（これは九版で、初版は同年三月一日）の金文字の背表紙のある貧乏物語を偶然にも発見し、何かの記念にと思い買った。帰って見て驚いた。最後のところに筆でこんな署名があった。

昭和二十年八月三日 主計長堀井少尉より之を受く

於 駆逐艦 檣

西村弘三郎 卿

八月三日といえば、日本の敗戦のわずか十二日前。そんな時、学徒動員？で出征でもした人が、河上肇の貧乏物語を大切に、おそらくは秘密にそつとかくしもっていたのか？それを出撃前に自分の友人か部下の一人にわたしていったのか？きけわだつみの声の様に堀井少尉は戦死したのだからか……西村弘三郎は……。又、本の最初の方には「佐藤文庫（私ではない）」、「岩澤文庫」などのきれいな角印がおしてある。私は、あの侵略戦争の中で生きつづけた河上肇の精神にいろいろと思いを注

せた。

日本共産党の機関誌「前衛」に「読書に想う」という黄色い二頁の欄がある。私は毎号必ずそれを読む。そこには各界の人々の読書と人生との係りがしるされている。そして、その中に河上肇の諸著作に影響された多くの人々を見ることが出来る。

五年程前、読売新聞が「青春紀行」を連載していた頃、こんな記事があった。筆者は音楽家の朝日奈降氏である。(一九八三年三月十四日付)

昭和三年京大法学部入学の同氏は、徴兵検査で丙種合格、体重六十キロでどこも悪くはない。検査官は同氏の「何故丙種なのか」の質問には答えず、京都大学だな、河上肇に教わっただろう。「河上先生は経済学部で関係ありません」……京大生は兵隊にとらない……「河上先生のおかげで僕は兵隊にゆかなくてすみしました。」と同氏は語る。河上肇の学問、思想が、時の権力にとっていかに危険なものであるかを物語る一端である。

三年前、私も参加する「河上肇音楽会」は、塩田庄兵衛先生らと共に河上肇の郷里岩国の生家を訪れた。部屋へ上り、甥の河上莊吾氏よりお話を聞き、絵や漢詩のはってある屏風の前で女房と共にカメラにおさまった。漢

詩の一つに次の文字が書かれていた。

人は老いて窮巷にひそみ

天は荒れて未だ紅を放たず

狗は吠ゆ、門前の路

雲は低る萬里の天

(河上肇全集第二十六巻二一七頁参照。昭和

十三年十一月六日 河上左京宛書簡)

今年正月、モスクワを訪れる機会があった。白雪に映える赤旗、頬を赤くそめ嬉戯として道ゆくナターシャの一群、赤の広場の夜空に輝くルビー色したクレムリンの赤い星。河上肇は、生前さぞこの風景を一目見たかったであろう。年年歳歳花相似たり、歳歳年年人同じからず、河上肇の精神は、時の流れをこえてからも長く人々の心の中に生きつづけることであろう。(元 京都市労連書記長、現 京都統一労働組事務局長)

一海知義著「河上肇そして中国」を再読して

石 井 公 代

神戸大学教養部教授・一海知義氏（中国文学専攻）著「河上肇そして中国」は、六年前の一九八二年に上梓された奇書である。同氏は河上肇先生の漢詩を殊の外に愛好されて、この書の前にも「河上肇詩注」や「河上肇と中国の詩人たち」を著しておられる。私も河上先生の詩歌が好きだから愛読しておるが、その鑑賞のために一海氏の専門的な評釈は何よりも良い指針になる。故にここに採り上げた「河上肇そして中国」も、上梓時に早速買い求めて熟読したが、今回書架より取り出して再読した。同書は

一、河上肇と中国の詩

二、河上肇と中国革命

三、漢詩人河上肇

の三章より成り、各章を三、四節に分けて詳述してある。その第一章では河上先生が出版後、中国の宋代の詩人

・陸放翁（一一二五年—一二〇年）の詩に巡り合った歎びと、その詩に傾倒された理由を、実に明快な考察と連意の文章とで解説しておられる。河上先生が晩年を一、自叙伝を書くこと、二、漢詩を含めて詩歌を詠ずること、三、陸放翁の詩の評釈を書くことを仕事とされた（同書38頁）ことは、本会報を読まれる方は皆罵とご承知のことと思うが、一海氏はこの二、詩歌を詠ずること、と、三、陸放翁の詩の評釈を書くこと、に就いて、河上先生の詩「ト書聊か買うを得、青鞵空牀に散ず、誰か知らん貧者の標、亦た白雲の郷あるを」（石井注。ト書、トは活字がないと思うので片仮名にした。虫くいの書物）を掲出して曰く「経済学の書物を買ひ払って漢詩本を買う。そして漢詩の世界に白雲郷、理想郷を見出す。（中略）」西洋の学問を身につけて来た河上さんの東洋への回帰でもあった。学究河上肇は、ここでも対象への趣味的アプ

ローチはしない。またもや対象との全身全霊的格闘を始めるのである」と。而して同氏は河上先生の人物像を、河上先生が陸放翁の人物像を「詩人・志士・道人」と分析したのと同様に、河上先生も「志士・詩人・道人」であったと評定して、その因由を詳しく布衍して下さる。

「道人」とは「哲人」或は広い意味での「宗教家」だと言う（同書62頁）。又一海氏はこの章の第三節「自叙伝の中の中国の詩」で、自叙伝に引用されている漢詩の出处と、その各々の全詩を掲げて、訓読みもむづかしい字の解釈も付けて下さっている。実に懇切丁寧である。これは自叙伝を読む者に極めて大きな参考（プラス）になる。同氏は中国文学者ではあられるが、能くもここまで調べ上げたものだと思える。数十の詩人の数々の詩の中からの抽出だからである。

第二章の「河上肇と中国革命」では、河上先生が中国の共産主義革命に寄せられた義望と期待を述べると共に、中国革命の先駆者達が、河上先生の著書を如何に多く読んで学んでいたかを詳説して下さる。前者で最も顕著なところは、先生が門下生の堀江邑一氏から借りたアメリカのジャーナリスト、エドガー・スノーの名著「中国の赤い星」を読み、深く感動して作られた漢詩「天は猶此

の翁を活かせり」の

秋風縛（ばく）に就いて荒川を渡りしは

寒雨靡々たりし五載の前なり

如今奇書を把（と）り得て座せば

尽日魂は飛ぶ萬里の天

に表われている。後者では吾々が最も良く知る毛沢東や周恩来や郭沫若を初め、多数の革命先駆者達の名と、その閱歷を詳しく挙げて、それらの者が読んだ河上先生の著書を列挙して下さっておる。そして先生の著書で中国語に翻訳されている主なものを十七冊、年代順に示しておる。これは河上先生が中国革命に如何に大きく貢献されたかを示す証左であろう。而してこの章の中の第二節「河上肇と徐特立」の結末で「海氏は「河上さんは中国の若達に影響を与えただけではない。殊にその晩年には中国革命から影響を受けもした。（中略）中国革命のルポルタージュを読んで「誤数行」し、刑余老残の身に励ましを受けたのである」と言う。（同書171頁）即ち河上先生と中国革命は、深い相関関係に在ったと言うのである。

第三章の「漢詩人河上肇」では、その第一節「漢詩人河上肇との出会い」で、一海氏が河上先生に出合った発

端と轡を述べ、その傾倒を吐露して、「私は河上さんの中国の詩に對する鑑賞力、その水準の高さと、漢詩作品が示す独創的なアクチュアリティに感心した」と言い、又「私は河上さんの短歌、和語の詩と共に、骨太でしかも繊細な詩情を表出する漢詩作品を味読して飽きない」と言う。次に面白いのは、第二節の「漢詩とエロス―河上肇の場合」である。「河上先生と女」の話は、誰の評論の中にも出て来ないので、私は非常に面白く読んだ。一海氏は先生の

「谷川温泉雜詠」の中の一首

溪流に臨みて座せば露天なる

いでゆにて女髪洗ふ見ゆ

數中で作った和詩

「老人の夢」の中の終句

金の屏風を背(せな)にして

翫ひし舞子の白き足袋

「ことしもまた絵を描かず」の和詩の中の

十五、六の娘の湯上りの肌を思わす甜瓜(まくわ)

先生が晩年に作った短歌

声色の慾はすでに絶えたれど

食慾のみは尚ほ御(ぎよ)しがたき

(一海注、声色は音楽と女色)

などを採り上げて曰く「河上さんの詩歌に於けるつやっぱさは晩年に至るまで失われない」と。

而してこの章の第四節「漢詩人河上肇の旧蔵書―京大河上文庫訪書記」で、河上先生が読まれた漢詩に関する和漢書を悉く掲げ、先生が如何に漢詩のことを勉強されたかを示し、最後を「平賊と戦争が晩年の健康をむしろまなかつたら、中国の詩や詩人についての水準高く独創的な著作が、さらにいくつか生まれていたであらう。漢詩人河上肇の旧蔵書と、それらへの丹念な書きこみは、そのことを十分に予見させる。まことに残念というほかはない」と結んでおられる。

私はこの書を再び読み始めて、巻を置くことが出来なかった。私も既に老残の身で暇(ひま)を持て余しておるが、この書がたとえ数日とは言え、閑暇無からしめて下さったことを著者に感謝申し上げる。蓋(けだ)しこの書「河上肇そして中国」は世上滅多に出合えない奇書である。

(昭和六三・二・五記)

「社会問題研究」合本寄付

— 岩国市立図書館 —

山口河上会

一九八五年秋発足した山口河上会は、県内の山口・小郡・岩国・宇部の各地で五回にわたり講演会を開催してまいりました。河上肇記念会のご配慮によって、杉原四郎、一海知義先生を講師としてお迎えして、河上肇の人物と業績を語っていただき、感銘を与えることができました。

このような形で河上肇を記念し顕彰するほかに、先生の郷里岩国において、河上肇を記念する何かを作るのも、当山口河上会の為すべき仕事のひとつではないかと考えています。その一つとして、岩国市立図書館における、「河上肇文庫」の設置をあげております。同館には現在河上肇著書は、筑摩書房「著作集」、岩波書店「全集」をはじめ多数所蔵し市民の利用に供しています。今回当山口河上会では、徳山市の「研究家のご好意によって、その所蔵にかかる



『社会問題研究合本』（全五冊オリジナル版一号—
〇六号欠号無し）

を同館へ寄付されるようお願いし、昨十二月十六日、当会細迫朝夫・砂田貴両氏と協の三名が図書館へ持参し、受納されました。

寄付された方は徳山市宋町長田昇氏（眼科医院長）で

氏のご厚意に深く感謝いたします。同館では現在河上肇著書編数六十一冊（評伝類を除く）あり、ゆくゆくは、「河上肇文庫」を設置せられるよう要望しています。

岩国市には、河上肇記念物としては最も大切な「河上肇旧宅」があります。同宅のことは「自叙伝」に詳しく述べられており、河上先生にとって忘れ難いものでした。われわれもまたぜひ後世に伝えなければならぬ記念物と考えています。幸い先生の弟左京氏、その亡き妹は甥細江吾氏が家を守っておられ、大切に保存されています。山口河上会は、これら、河上肇を象徴する記念物の保存に役立つような方策を研究したり、実行することも大切な事業と考えております。（山口河上会 脇 英夫）

編集後記

○今年の総会講演は、前衆議院副議長・元社会党委員長橋田清一氏を予定していましたが、ご夫人の不幸のため、やむなく変更となりました。ご夫人のご冥福を祈ります。

○本号は、「河上肇と私」などのご寄稿を集めました。今後とも特集「河上肇と私」を継続したいと思っています。会員諸氏のご投稿を期待します。

○来年は河上肇生誕百十年に当たります。是非記念事業を開きたいと、世話人・事務局は思っています。会員諸氏のご提案を待っています。①河上肇の劇画（全国から募集）、②新版「河上肇抄伝」の発行、③河上肇詩歌朗読テープ、④講演会、⑤河上肇書画・資料展、等が今までにあがっています。

○「ダカーボ」誌の「戦後のベストセラー」（毎号連載 木本至氏執筆）に「自叙伝」（世界評論社版）がとりあげられている。「週刊朝日」の調査で、昭和22年ベストセラー8位（4万部×4）と、短い文章であるが、自叙伝出版の経緯が木本氏の取材で読ませる。（一六五号、八八年九月七日）

○当会報は三十冊を越え、バックナンバーも最新号のみとなってきました。紀平氏の調査で、全号保存され、閲覧できるのは、国立国会図書館、大阪市立中央図書館であるとのこと。

（細川 記）

● 会員通信 ●

〔一〕 総会出欠返信その後

和歌山県有田郡 柳瀬 泰助

今年も限知事選の真最中で後援会長をして居りますので悪しからず御免下さい。会報にも載って居た河上秀夫人著留守日記の発行所は何処ですか、今でも入手出来まじょうか。

〔事〕 筑摩書房 昭和四二年発行 定価七六〇円ですが、古書店でしか入手困難かと思われます。

神奈川県湯河原町 田中 文蔵

住谷先生の御逝去お悼み申し上げます。降って私儀、夏あたりからようやく回復してきました。他事乍ら御放念下さい。

川之江市 千田 晴之

現在河上会に辿り着く迄の小文を書き進めております。脱稿次第送ります。私の左腕にはR N K労働援会のバッジがいつもあります。一九四七年早春復員復学した東大で学友に話しかけられ、五円のカンパをして入会した記念のものです。河上精神を大切に、生涯このバッジを胸に歩き続けます。

松山市 井手 良

せめて本年中に募金だけでもさせて載き度く、その内必ず総会にも出席致します。

京都市 長砂 實

会報は楽しく読ませていただいています。学生時代（一九五一—五五年）の河上祭、ノーデーでの肖像画などいつも懐かしく思い出しています。

す。今夏三週間、十年ぶりにソ連を訪問し、広く視察してきました。小生の専門はソ連経済ですが、ペレストロイカの息吹きをじかに感じてきました。河上先生が将来を期待されたソ連は大きく良い方向に変わろうとしています。『社会主義』を『死語』としないよう頑張る積もりです。

神戸市 湧井安太郎

会報を通して杉原・一海先生の文章を楽しんでいます。お二人とも西宮・神戸に在住と、京都よりは近い方ですのにご著書を通して一方的お近づきになっています。

名古屋市 山口 幸一

河上先生の身近かに座している錯覚にとらえられるので悲憤に走りますが、なにせ搾取の上に頭部外傷を被った小生は六六歳の加齢者で、本

年五月も故師の勤めし都ホテルに愚妻と共に泊して靈を偲びました。その道中で先生御夫妻の墓前に顔づいたのです。

安城市 佐藤 直介

政党や労働組合の権力追従が目立つ今日、「保身」ではなく「道理」によって動いた河上肇の生き方とその業績はいよいよ輝きを増してきたと思います。岩波文庫から「河上肇評論集」が刊行されたのもうれしいことです。

京都府大山崎町 木村 誠一

充実した会報になり嬉しく思っています。人間性欠落の現代社会の中で経済学の果たすべき役割が大切であると思います。一年一回の総会は非常に元気になる日でもあり、自己活性化への糧にしたいと考えています。

す。

京都市 寺前 いわお

毎回一度は出てみたいと思いが、今年も京都人でありながら不在のために出席できず残念です。最近ニュージールランドから帰った人に政府発行の「非核のニュージールランド」というパンフを見せられました。冒頭ロンギ首相の「ニュージールランドは非核の国である」と書いてあるのを見て、唯一の被爆国である日本で、このような政府パンフが出せないのはきわめて残念だと思いました。

豊中市 後藤 嘉七

河上先生の学問的功績とその真摯な人格を心から尊敬する者の一人として、今日ほど先生の偉大さを思わずには居れません。河上会が益々発展することを望んでいます。

水戸市 河原井 忠男

昨日、住谷先生逝去の新聞に接し、あまた一つ良心の火が消えたかと悄然たる思いでした。マスコミに天皇の記事の絶える日はなく、又水戸の街も右翼の輩の跋扈しない日はありません。我々は先生の意思を体して、この世に警鐘を打ち鳴らす人とならねばならないと思うこの頃です。

□ 会費納付振替通知から

(九月―十月)

新潟市 斎藤 信郎

会報御送付頂き誠に感謝に存じます。河上肇氏の人格・文章の魅力の深いことに驚きと畏敬禁じ得ません。経済学の内容の検討はあまりなされていないのは残念です。近時の人・近時の人のものを取り扱うのが便利でしょうが、実質的に何が進歩しているのかの吟味が必要です。小論目

にふれたら御高評下さい。

長岡市 大塚 君子

法然院の集まりには出席できません、残念ながら前約がありまして、会費と少しばかりのカンパをそえて送金いたします。

群馬県群馬郡 加藤 一郎

息のながい御活躍に頭が下がります。

会員通信（会報二八号以後）

山口市 加藤 碩

会費納入が遅れて申し訳ありません、私の多忙と怠慢のためです。河上肇自叙伝は大学時代、夏休みに父の書棚から取り出して読んで以来の感銘深い名著です。

徳山市 富吉 繁貴

例会、いつも参加できず申し訳ございません。次の細道先生の会報を楽しみにしております。二八号も興味深く拝読させて頂きました。

熊本市 井上 栄次

八七年も今日で最後になりました。INP全廃条約の調印を成功させた世論の力をかみしめて新しい年を迎えます。河上肇記念会会報毎号楽しみにしています。事務局御一同様の御健勝と幸多き御越年を願ってやみません。

北見市 名苗 充穂

入院、退院のくりかえしを重ねておりましたので、未納がございましたらお手数ですが、お知らせ下さいませ。「京都に煙あり」を定期購読いたしたいと思いますが、この通信

欄を通してお願いいたしてよろしいでしょうか。

大阪市 上林 明

脑梗塞余後不良のため困っています。皆様宜しく。

広島市 青盛 和雄

久し振りの会費送付なのに便かて相済みませんが御笑納下さい。傘寿讃記念日を迎える頃になって京大のよさがわかります。

田川市 大村 優

二八号読ませて頂きました。事務局のみなさまの御苦勞が理解できます。健康に留意されて今後も頑張ってくださいと思います。

長崎市 川原 竹一

昨年十一月二日(土)、法然院に河

上華博士御夫妻のお墓に詣りました。竹筒の名刺入れに拙稿「今日に生きる貧乏物語」(朝日新聞長崎版、一九七九・一〇・二二号コピー)を入れました。十二月に事務局からおは

がきと会報を頂戴いたしました。墓参の帰りに知り合いのT書店に立寄り、河上博士の「貧乏物語」上製本(大正六年十一月一日改訂第十三版)を記念に買いました。手許にありますのは三十年前、学生時代神田古書店で入手しました大正六年四月二五日改訂第八版の仮綴本です。上製本も刊行されていたのです。昨年古書店から「絶筆と年譜」(昭和二十二年二月二三日発行 勤労者生活擁護協会 十五ページ)入手しました。

神戸市 曾我 まり

会報二八号頂戴いたしました。私の拙文が購読がましくのり恐縮いた

しました。お世話さまでございます。

堺市 小田 正大

会報二八号送付ありがとうございました。受け取りました。特集「河上肇と私」楽しく拝読致しました。総会で杉原先生より御紹介がありました「河上肇と関西大学」展示会に参りました。先生の歌碑「多度利津伎……」は私の様な若輩は万葉仮名はよく読めないままでしたが、展示会で下記の如く掲示してありましたので参考までに書きました。「多度利津伎布理加幣利美礼婆山川遠越而波越而来都留毛野香那」

東京都 杉本 正二

事務局の皆様にお礼申し上げます。本年もよろしく願います。古人の跡を求めし所を求めよ」とかい

う言葉を思いかえています。

京都市 山崎 利一

本記念会の運営経費について会報二八号でご苦心の程拝見しました。私見としての三案は何れも重要ですが、会費値上げは止むを得ないと思います。本年の総会において提案されれば承認されるものと信じます。大変でしょうがよろしくお執り計らい下さい。

長野県穂高町 平井 重男

もろもろの世の現象は益々「河上イズム」の昂揚が求められているものと思われまふ。これが実現の為一層の御尽力を希っております。

高山市 池之端基衛

河上先生の伯父宛の書簡を発見し、改めて先生の偉徳を思んでいます。

兵庫縣城崎町 古池 儀一

新入会。会報等ありがとうござい
ました。河上先生生誕百周年記念行
事の一つとして行なわれました一海
知義先生の『河上肇と中国』の講話
をきき、大いに感ずるところあり、
その後、河上先生の御著作は座右に
しております。先日念願のお参り
をすることが出来ました。愚妻古池
孝子も入会させてほしいと言ってお
ります。よろしくお願い申し上げます。
会費二名分と残額は雑費にして
下さい。

明石市 若林 正昭

会報をいつも楽しみに致しており
ます。河上肇先生精神が今日的に発
展させられ、民主主義と平和の発展
に貴会が大きく寄与されるよう願っ
ています。

大阪市 栗山 四郎

四月中旬、友人（八一歳、四・一
六に闘わった）と小生（八十歳）が
足ならしに法然院に詣り、河上先生
の墓前に顔づきました。兩名とも無
神論ですが、先生の前では来たるべ
き臆のことを思い、生前のご立派さ
に言うべき言葉もありません。一九
四五年前後の食糧事情を思えば、先
生に手を差し伸べる人の少なかった
こと（著書のより）を思い、ひたす
ら孤愁に明け暮れた当時を思い、感
慨無量です。

草津市 田中 栄一

光と風のさわやかな草津の里で、
晴耕雨読と言えば恰好が良いが、実
は「往年の面影はなく庭仕事」とい
うところです。

大同英大郎宛 奈良市 内田 稔吉

河上会の献身的御活動、いつも乍
ら敬意を以って拝見しています。川
勝氏なくなられ、四月に入って先輩
知友六名が世を去り周回ガラガラに
なった感じ。老兄には体力を保持さ
れ、是非長命されますよう、御活動
の成果、必ず世に出る日があらうと
思います。そういう時期になりつつ
あります。宇都宮さんのお仕事もよ
うやく世に出なかった感じです。日
本だけ見えていて好景気だと政府財界
が騒ぎ立てているが、世界経済・世
界市場の中で見ると妙上の樓閣。樓
閣が大きくなるほど反動が大きいで
しょう。

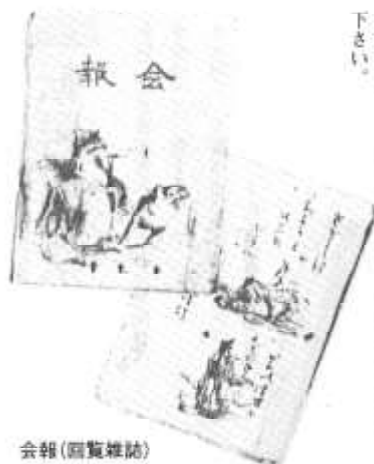
（八八年四月十八日 着信順）

（つづく）

入会のすすめ

河上肇記念会は、関西を中心として正式に発足して満十五年になります。毎年秋には、河上の墓前に集まり、法然院にて法要を営み、会の総会を開いております。会員の資格は会則にある通り、河上先生に学び、先生を知ろうとする人びとです。是非ご入会をおすすめします。

会員の皆さまには友人、知人にこの会をご紹介下さい。



会報(国賀雑誌)

河上肇記念会 会 則

- 一、この会は河上肇記念会と称し、大阪市(または京都市)に事務所を置く。
- 二、この会は、河上肇先生の人格とその業績を讃え、これを広く、かつ永く伝えるための研究ならびに事業を行う。
- 三、河上肇先生を敬慕し、先生に学び、先生を知ろうとする人びとを会員とし、いかなる資格ならびに政治的立場を問わない。
- 四、毎年一回総会を京都で開催、その他随時集会および事業を行う。
- 五、この会の会友および世話人は別の定めによって選び、総会において承認を与える。
- 六、世話人代表はこの会を代表し、世話人中の事務局担当が事務を執行する。
- 六、この会の経費は、会費ならびに寄付金をもってあてる。
- 七、この会費は年額二〇〇円とする。
- 七、この会則の改廃は総会の議決による。

転居通知のお願い

転居、住所表示変更などのあった場合は
事務局へご一報下さい。

〒542 大阪市南区島ノ内一―二〇―一九

(丸善石油ビル) 千代田商事株式会社内

河上肇記念会



貧乏物語 初版

〒 542

大阪市南区島ノ内一―二〇―一九 (丸善石油ビル)

千代田商事内 河上肇記念会

電話 (〇六) 二五二―三六九六

振替口座 大阪 三二三一九五

京都(きょう)に煙あり

1965年 創刊 頁今51号

『煙』同人社

京都市中京区西ノ京橋ノ木町11の24

児玉 誠 方

電話 京都 (075) 811-7646 番

振替 京都 2-15653 番

戦前日本プロレタリア文化運動の生き残り10名(75~85才)が出している異色の同人誌。語り部として戦前活動家の埋もれた青春像の発掘を柱に『煙』を編集・発行する一面、同時に戦後への架け橋たらんとしてもいます。

A 5 版 120 頁 頒価 500 円 〒 200 円